

【ミャンマー】外信部 辻淳子

模擬裁判で明かされる人権侵害＝性暴力、死の道路…

軍事政権による圧政が続くミャンマー(ビルマ)の人権侵害状況を訴えようと、性暴力や強制労働の被害を受けて国外へ亡命した女性らがこのほど来日、軍政トップのタン・シュエ国家平和発展評議会議長を相手取り、都内で模擬裁判「ビルマ女性国際法廷」を実施した。関係者による数時間に及ぶ証言などの末、「国連の潘基文事務総長の権限、または人権理事会の決議による独立した国際調査団の派遣」などを盛り込んだ勧告的意見を採択した。模擬裁判は市民団体「ビルマ女性連盟」(タイ・チェンマイ)の主催で、特定非営利活動法人(NPO)ヒューマンライツ・ナウが共催した。



「ビルマ女性国際法廷」で毅然(きぜん)と証言するマブセインさん(右)＝6月27日、東京都、青山学院大学(時事)

◇NYに続き東京で開催

法廷では生々しい証言が相次いだ。「不処罰がはびこり、国軍兵士らによる日常的な性暴力が軍政支配の道具にされている」(国際人権NGOヒューマン・ライツ・ウォッチ東京ディレクター土井香苗さん)、「道路工事に伴う強制労働で、過労死する犠牲者が大勢出た。このため、この道を『死の道路』と呼んだ」(マブセインさん、54歳)。「学生運動に参加したことで28日間にわたり拘束され、シャワーも歯磨きも許されず、何度も一晩中、直立のまま尋問を受けた。同室の妊婦は電気を通す拷問を受け、出産3日後に赤ん坊は死亡した」(チーチーキンさん、36歳)ー。涙ながらに訴える姿に、癒えぬ傷の深さがうかがえた。

強制労働では、国境地域に多く居住する少数民族は一家につき1人を差し出すよう命じられた。原則は男性だったが、マブセインさんの夫は民主化運動に参加して逮捕され、その後亡命したため、マブセインさんは1993年から96年にかけて、西部ラカイン州の大規模な道路工事にやむなく従事。「2週間に1度しか帰宅を許されず、4人の幼い子供だけを家に残したまま、ひもじい思いをさせることもあった」といい、耐えかねて97年にバングラデシュへ当時3歳の息子を連れて逃れたが、今も過酷な環境下にある子供のことが心残りという。

この裁判に先立つ3月、同連盟とノーベル平和賞を受賞した女性らがニューヨークで同テーマで初の模擬裁判を開いた。今回は問題が実際に起きているアジアで、より身近な問題として考えてもらうのが狙い。「いまだに弱い女性の立場は、克服すべきアジアの共通課題」との指摘もあった。

また、この時期の開催には、民主化運動指導者でノーベル平和賞受賞者でもあるアウン・サン・スー・チーさん(65)の約15年にも及ぶ軟禁状態に民主化の遅れが象徴されるミャンマーで、年内に予定される総選挙では到底、正当な結果など望めず、当局の思惑通り進むほどに「どんどん民主化から離れていく」(同連盟)との危機感がある。「結果は認めないと日本政府をはじめ、国際社会に決断してほしい」(同)という民主化を求める諸団体の思いは切実だ。

◇目指すはICC提訴、日本も自覚を

民主化運動に参加して祖国を追われ、インドに亡命したティン・ティン・アウンさんは裁判後、「偏見を恐れてミャンマーで訴えることができない性暴力は、女性の心身に深い傷を残す。また、大変苦しいトラウマを強いるほか、社会的立場も脅かす」と述べた。発覚がもとで追われて行き場をなくし、売春婦になったケースもあると明かす。

もはや国内司法に頼ることができない以上、国際刑事裁判所(ICC)への提訴を目指すのが、ミャンマーがICC未加盟で、提訴には国連安全保障理事会の決議が求められる。決議にも同国と経済・軍事的つながりを持つ中国、ロシアの反対が予想されるため、そこに期待される日本の役割があるという。アジアの主要国、日本から国際社会全体へ問題に対する理解を広め、提訴にこぎつけたい考えだ。

当日、模擬裁判の会場にはミャンマーメディアの男性の姿も多く見られたが、日本メディア側は女性が目立った。事態打開には、国家間のやりとりだけでなく、より「草の根」レベルで自覚を持ち、問題を共有する必要がある。傍聴した女性(41)＝東京都北区、無職＝も、「日本で当たり前前に与えられている自由や人権のなさを当事者から直接聞き、ショックだった。ただ、問題を知るだけにとどまらず、一般市民が次のステップとして何が出来るかが今後の課題」と述べた。「本裁判」の行方を見守りたい。(了)